

長崎街道

Nagasaki Kaikou

かつて長崎街道という道があった。諸国大名の参勤交代や、出島に赴任してきたオランダ商館長などの江戸参府に利用され、鎖国時代に海外からもたらされた珍しい文物もこの道を通って江戸に運ばれた。街道は、江戸幕府の維持・発展のための大切な動脈であり、アジアやヨーロッパと結ばれた壮大なロマンの道でもあったのである。長崎街道は、今も現代に生き続けている。この道の偉大な歴史にふれることが、ふるさとの新たな魅力の発見につながるのかもしれない。そんな期待を抱きながら長崎街道の小さな旅をはじめよう。

西の箱根と呼ばれた日見峠

長崎街道は、長崎から日見、矢上、永昌、諫早、大村、松原、彼杵を経て嬉野に入り、塚崎、武雄、北方、小田、牛津、佐賀へ通って、境原、神崎、中原、轟木、田代、原田、山家、内野、飯塚、木屋瀬、黒崎、そして、小倉に至る五十七里、約三〇キロの道である。今回は長崎から彼杵までを徒歩と車の二足のわらじでめざすことにした。

長崎の起点については、西役所があった現在の県庁付近、出島など諸説があるらしい。しかし、いずれにしてもここは通過したであろう、そう確信できる道標が桜馬場にあった。長崎街道ここに始まる、と書かれた石碑、今回はここからのスタートである。

シーボルトの江戸参府の際に宴が開かれたという桜馬場天満宮を通りすぎ、古橋、一瀬橋を渡り、蜷茶屋へと向かう。かつて蜷の名所だったというこの茶屋跡は、旅人と見送る人との別れの場所。きつと様々な物語がこの地に刻まれたに違いない。

見送る人がいないなか、蜷茶屋から妙相寺道のバス停に向かい、左手に本河内水源地を見ながらゆっくりと歩く。このところ雨が少なかったせいか、ダム底の顔をのぞかせているところもあるが、それでも湖面を渡ってくる風は心地よい。

西トンネル口から横断歩道を渡り、日見峠へ向かう坂道を上っていく。谷間に響くウグイスの声、愛らしい姿を見せる黄色い菜の花…。幼い頃の記憶を呼び起こす懐かしい風景がそこに広がっていた。

しだいに勾配を上げながら迫ってくる坂道を、一歩一歩踏みしめながら上っていくと、ようやくひと息つける道にでる。そして左手にそびえる地震神社に向かってさらに険しい道が続く。

日見峠は、一五八八年（永禄十一年）に道路が開かれ、江戸時代には西の箱根と呼ばれるほどの難所であったという。確かにそうだが、この道をどうやって駕籠をかついで上っていったのだろうか、息を弾ませながらそんなことを考えていると、地震神社にたどり着いた。神社前の細い道を通っていくと閑所跡があり、やがて新道に出る。ここからは峠をひたすら下る。暖かな陽射しと爽やかな春風を楽しみながらゆっくり歩いていくと、一気に眺望が開けた。街並みの向こうには雲仙岳がその勇壮な姿を見せていた。

矢上宿から永昌宿、鈴田峠へ

峠を下り、車に乗って矢上神社に到着。ここが矢上宿跡である。この地は鍋島・諫早支藩の支配地で、矢上宿には鍋島藩の番所があった。馬や駕籠人足などが常に用意され、旅籠、酒屋、鍛冶屋などが軒を連ね、近隣の村々の中心地として賑わったという。一八二六年（文政九年）、江戸参府のために出島を出発したオランダ商館長とシーボルトの一行がこの宿の教宗寺で昼食をとったことでも知られている。

矢上地区は、車社会の進展とともに長崎市のベッドタウンとして発展してきた。八郎川を隔てたかき道には団地が形成され、国道沿いには、賑やかな看板を掲げた様々な店舗がひしめき合っている。街道はそんな国道とか肩を並べ対照



本河内水源地



日見峠を下ると一気に眺望が開ける



地震神社



オランダ商館員の江戸参府の行列 シーボルト著「日本」(県立長崎図書館所蔵)